八十年代の謝冰心について

岡田祥子

はじめに

謝冰心（一九〇〇〜）は五四運動期に創作活動に入った。彼女は「両個家庭」を皮切りに、「斯人独憔悴」、「秋風秋雨愁殺人」、「去国」等、短期間につぎつぎと多くの小説を発表した。(1)これらの小説は人道主義の立場から、封建社会や家庭に対する不満、社会生活の悲惨な状況、インテリ青年の心の葛藤等、人生や社会における諸問題を多岐にわたって描いていたから、問題小説だと言われ、(2)多数の読者に賛同と共感をもって読まれた。だがしかし、中には「悲惨なことを書きすぎるのでは」との声も少なからずあったので、冰心は、一九一九年十一月十一日『晨報』に発表した「我做小説、何曾悲観呢」の中で、

私が小説を書く目的は、ただ社会を感化したいためです。ですから、読んだ人がはっと悟って、改善したいと思ってくれるよう、極力古い社会や古い家庭の良くない現状を描くのです。話が沈痛悲惨でなければ、読者の注意を引けないし、読者の注意を引くことができなければ、彼らに社会を改善しなければと思わせるほど感動させるのは難しいのです。

と書いて、自分は社会を変えるような小説を書いていくのだと表明したのであった。

しかしその言葉とは裏腹に、二三年の米国留学以後から、七十年代後半までの冰心は、初期の作品とは違って、月や花、鳥、海、児童、母親等を好んで描いて好評を博した。その作品の多くは、作者の身辺の些細なものへの視点の優しさは表出されているものの、社会問題意識の高いものはあまりなかった。

八十年代に入ると、冰心の作品の傾向は大きく変化した。政治への不満や、指導者への強い不信、特権階級への憤り、文化大革命を真正面から糾弾するなど、社会問題意識の非常に高いものとなった。冰心を母とも姉とも慕い、八十年近く途絶えることなく交流を続けてきた作家蕭乾（一九一〇〜）は、その変化をつぎのように書いている。

冰心は、歳はまもなく九十になろうとし、手足も不自由になってしまったのに、すでに獲得した栄誉に甘んじることなく、片時もペンを休めようとしない。彼女は「寄小読者」や「超人」にも決して劣らない、世の人を驚かせるような重要な文章を書いている。たとえば「我請求」、「万般皆上品……」、「介紹三篇小説散文」、「（孩子心中的文革）序」等。彼女は小中学校教師に代わって声を張り上げ、力の限り、少しも恐れることなく「文革」を糾弾する。ある編集者が私にこう言った。「冰心の文章は確かに良いが、扱いにくい」と。これは言い換えれば、「彼女は痛くも痒くもない文章は書かない」ということだ。彼女の文章は例によって長くはないが、中身がある。(3)

一九九四年十二月出版の『冰心全集』（卓如編　海峡文芸出版社　全八巻）には、冰心が創作活動を始めた一九一九年九月から、一九九四年十二月までの全作品が収められている。八巻巻末の「全集篇目分類索引」によれば、七五年の作家活動の中で、冰心は散文を八二七篇書いている。そのうち八十年代の作品は二九九篇にものぼる。小説は全部で六十篇書き、七篇が八十年代の作である。この八十年代の作品の数の多さは、蕭乾が「片時もペンを休めようとしない」と言っている言葉を裏付けるものである。

問題小説を書くことによって作家活動に入っていった冰心が、五四期を除くと、七十年代後半までの長い年月、社会に影響を与えるような作品を発表することはなかった。ところが八十年代に入ると、社会問題意識の高い作品を数多く発表するようになり、人々を大いに驚かせた。そこで筆者は、なぜ冰心が人生の晩年になって大きな変貌を遂げたのか、少しばかり考察してみたいと思い、この小論を書いた。

一

冰心が創作した小説の数が全部で六十篇だということは、彼女の作家経歴の長さや、散文の数の多さから見れば多い数とは言えない。六十篇の小説のうち三二篇は、五四期の作品で、そのほとんどが問題小説として社会に大きな反響を巻き起こしたものである。二三年から、七九年までの五六年間にわずか二一篇しか書いていないが、そのうち解放後のものは七篇である。

八十年代に入ると冰心は先ず「空巣」を書き、続いて「明子和咪子」、「橋」、「万般皆上品……」、「遠来的和尚……」、「落価」、「干渉」と立て続けに七篇書いた。(4) 八十年代は五四期についで多くの小説を書いたし、その内容も蕭乾のみならず、台湾『聯合報』記者、張自強も「冰心は毎週のように文章を発表しているようだが、その内容はかなり鋭く、往年の『女士の文章』(5)の風格がある」と述べているように、(6)五四期にも匹敵するような作品なのである。

八十年代の小説はすべて、知識分子の日常生活の一コマを、世相を反映させながら、強い風刺と皮肉を込めて描いている。なかでも八十年代後半に書かれた「万般皆上品……」、「落価」は、当時の中国の教師の社会的地位の低さや、待遇の悪さを若者の間に横行する拝金主義を軸にして書いた作品である。「万般皆上品……」では、大学助教授を父親に持つ息子が、大学進学をやめて、タクシーの運転手になることを決めたとき、父親に向かってこう叫ぶ。

暮らしを立てていくには、勉強なんて必要ない。金儲け第一主義でなければならないんだ。清廉高潔では生きていけない。

と。「落価」は「万般皆上品……」の翌年、八八年に発表された。一部紹介する。

お手伝いの小方が、私の家に来て、二年が過ぎると突然、「うどん屋の店員になることに決めました。毎月の給与は百九十元、他にボーナスもあるんです。私はあなた方と別れがたいのですけど、お金が必要なんです」と言った。私も娘の小真も「暇があったらいつでも家に遊びにいらっしゃい」と言って送りだした。小方は実家にでも戻ってくるように毎週やって来た。色鮮やかなワンピースを着て、すっかり肉付きがよくなって、まるで別人のようにきれいになった。彼女は来るときは、いつも土産を欠かさなかった。あるとき、彼女は小型のラジオを持ってきた。ラジオでニュースを聞くほうが新聞を買って読むより、安くすむという考えからだった。私は「新聞はニュースだけじゃなくて、別にたくさん記事があるのよ。それに読んでしまったら、まとめて廃品回収業者に売ることだってできて、わずかでもお金になるのよ」と言うと、彼女は、「ボロなんて何の値打ちもないんですよ。今、みんな言っているのを知らないんですか。一切の物が値上がりしているけど、ボロと知識だけは値下がりしてるって」。私は心の中でこうつぶやいた。「ボロ同然に、私たち教師の値打ちも下がってしまったんだわ。このことは私にだってもうとっくに分かっていたんだけど」と。

冰心が張自強に語ったところによると、(7)改革、開放政策が実施され、経済が発展しはじめた八十年代半ば、教育界は深刻な事態に陥った。師範学校の卒業生の大半が、教師になることを拒否したり、多数の教師が学校を離れ、自分で商売を始めたり、待遇のよい職場へと移っていった。金儲けに目と心を奪われ、知識や教育を軽んじる者が多くなったのである。冰心はこういう社会現象は、中央政府や、指導者が経済の発展にのみ力を入れ、教育行政を後回しに

しているからだとして、たびたび苦言を呈する。(8)

目下指導者は、国家を発展させるためには、先ず経済を発展させねばならないと考えている。彼らの中に、生産を優れた任務と見なし、教育を劣った任務と見なす考えが台頭している。このような考えの指導者の下では、我が国の教育経費の、国家予算に占める割合が、極めて少ないのは当然です。堂々たる中国が、九百六十万平方キロの肥沃の大地が、二十一世紀には、文化の砂漠と化してしまうのを、このまま傍観しているわけにはいかない。

冰心は不合理や不正を見聞きするたびに、不満や憤慨を文章にして、堂々と公表するようになったのである。八十年代以降のそんな冰心を、楊昌江は、『「老柏揺新翠」―論冰心新時期以来的創作』という論文(9)の中で、つぎのように書いている。

冰心は外見は柔和だが、内は剛直である。彼女は決して優しくはない。彼女の思想性格のもう一面は、愚昧、虚偽、邪悪を忌み嫌うこと、それらと戦うことである。晩年になればなるほど、冰心は愛憎がハッキリしてきて、凛然としたものがある。だから蕭乾も「老年になった冰心は、驚くほど勇敢になり、今までよりいっそう光輝いている。これまでずっと人間の愛を描いてきた筆を、邪な権力や、堕落した世相に向け、実に生き生きとしている」と語っているのだ。

蕭乾と冰心は、姉、弟と呼び合う、家族のような間柄である。(10)蕭乾が老年になった冰心を「驚くほど勇敢になった」と言えるのは、八十年以前の冰心を、逐一目の当たりに見てきたからである。

五十年代から、七十年代を通して冰心は、他の多くの知識分子と同様、指導者の意のままに動き、一本のネジ釘となり、一つの便利な道具となることだけを願って生きてきた。彼女はひと声も上げず黙りこくって、書きたい

ことも書かなかった。(11)

五十年代初めから七十年代終わりまでに冰心は、散文を二百篇余り発表しているが、文革中は、自らも「『四人組』が横行していたころは、私は書くことができなかったし、書く勇気もなかったし、書きたくもなかった」と述べているように、(12)毛沢東を歌った詩を一篇と、毛沢東死去二日後の、七六年九月十一日に、彼の業績を殊更に讃える追悼文を一篇書き、他に日中国交回復に触れる内容の散文を二篇書いて、香港の『大公報』に発表しているだけである。

ひたすら一本のネジ釘となることだけを願い、書く勇気もなかったという冰心が、八十年代に入ると、突如として中央政府の政策を批判するような言動を吐いたり、文章を書いたりするようになったのである。そんな冰心の言動に中央政府が神経を尖らせないはずがない。巴金（一九〇四〜）はそれに触れている。

私は、冰心が貴重な心血を注いで書いた文章を理解しないで、勝手に削って簡単にしてしまう人がいることを聞いているし、彼女の一部の「目障りな文章」が、人に歓迎されないことも知っている。それらを読者に見せるには、作家としての多大な勇気を必要とするにちがいない。(13)

これは八七年七月、冰心が「万般皆上品……」を書いたとき、中央政府から内容の書換えや、削除を迫られたことを言っているのである。冰心自らも「我請求」の中で、そのことに触れ、「それは初めての挫折であった」と述べている。

私はかつて自分自身が見聞きしたわずかな事実に基づいて、一篇の小説「万般皆上品……」を書いたことがあります。婉曲に、間接的に一助教授の不運に触れるものでしたが、この急遽書き上げ作品は、すんでのところで印刷機からはずされてしまうところでした。それは、私の六十年の創作活動の中で出会った初めての「挫折」でした。上層部の通告があって、刊行物でこの種の問題を語ることは許さないということでした。もし、原稿を整理

する編集者が、「これは小説であって、ルポルタージュではない」と道理を説いて説明してくれなかったら、どうして掲載することができたでしょうか。いくつか刺激的な言葉を削除して、やっとどうにか掲載されたのです[14]。

中央政府によって、初めて近代化への正式な取り組みが宣言された三中全会[15]以後の中国は、かなり言論や行動が自由になったと言われる[16]。蕭乾の言い方を借りれば、指導者の便利な道具となることだけを願って創作活動を続けてきたという冰心が、八十年代に入って変貌したのは、自らも「これからは、今までよりずっと開放的になるような気がする」と語っているように[17]、三中全会以後の中央政府と指導者に寄せる信頼と期待が大きかったからにほかならない。だからこそ、月や花、鳥等に代わって指導者への不満や、文革を批判する文章を書き出したのである。ところが意に反して、「万般皆上品……」が中央政府の指示により削除させられたり、書換えさせられたりした。冰心の指導者に対する信頼と期待は裏切られたのである。挫折直後の八七年十一月に、冰心と会見した張自強は、つぎのように書いている[18]。

冰心は物静かに私に語った。「私は若いころ、書いたものを発表する勇気がなかったの。今では歳をとってしまったけれど、今までのように書かなかったら、時間がなくなってしまうわ」。四十年来、彼女はずっとどうすることもできない悩みを、心に鬱積させてきたのだ。彼女は私を見て、背筋をぴんと伸ばすとこう言った。「私はもうこんなに年をとったんですもの、なにを怖がるの、なにも怖いものはないわ。言うべきことはちゃんと言うつもりよ」と。

新中国成立後、冰心は中央政府や指導者の意のままに生きてきたのだが、内心ではそれを恥じ、四十年間、挫折感を抱きつづけてきたのであった。祖国は変わるのだとの確信をもって書いた文章が、削除させられたり、書き替えさ

せられたりした。冰心にはまさかのできごとだった。積年の挫折感が現実の挫折となった時点で、冰心はこれからは大きく変貌しようと強く決意したのである。

二

『「真」的文学…生活与心霊自由的交接処建起―従冰心近作説開去』という論文で、章雲は、つぎのように論じている。

三中全会以後、中華文化が復活し、中国の文壇が生気を取り戻した時点になって、初めて冰心は自らの力作「空巣」をもって、「真」の文学の境地へと入っていった。豊かではあるが、平坦ではない創作の道を歩んできた冰心が、それまでの自己の小説創作における芸術的実践を反省し、自己の感情を整理して、「空巣」を書いた。続いて「万般皆上品……」、「落価」等の掌編小説を書くことによって「真」の文学の頂点へと登り詰めていったのである。(19)

冰心も「空巣」が「全国優秀短編小説賞」を受賞した直後の八一年三月、「『空巣』は、ぜひ書きたいという本当の心情にかられて書きました。心に気がかりのない状態で書いたこのような文字こそ「真」なのです。「真」の文学は、人々が前向きになるよう励ましてくれるものです(20)」と述べている。

「空巣」は、三中全会直後に書かれた小説である。解放前夜、祖国の未来に絶望して米国に逃亡した友と、新しい中国に将来を託して母国に留まった友が、三十年ぶりに北京で再会する。二つの異なった社会と家庭を対比させながら、別離後から三十年間の二人の来し方を描く。米国に渡った老梁ははやくに妻を亡くし、ひとり息子の家族とも疎遠であり、研究成果をまとめる経済的ゆとりもなく、年老いてひとり寂しく暮らす家庭は「空巣」なのである。一

方、中国に残った老陳は反右派闘争、四清運動、文革と引き続く苦難の日々を妻とともに生き抜き、今新しい政策が実施されて、夫婦共々教職に復帰し、豊かではないが、娘の家族と共ににぎやかに暮らしているという内容である。「空巣」を読むと、作者の三中全会後の中国の変化にかける期待の大きさがうかがえる。作者は、反右派闘争、四清運動、文革を批判しながらも、老陳に、祖国は必ず良くなるとの信念を持たせ、「遠くバラ色の天の果てを夢見て苦難の日々を耐えてきた。その良きときは今まさに来ようとしている」と老梁に向かって言わせている。

「真」の文字、「真」の文学とはなにか。冰心は創作活動を始めてまもない二一年四月、『小説月報』に「文芸叢談」を発表し、その中で、「真」の文学について書いている。

他人のものを剽窃した文字は自己を表現していないし、無理やり書かされた文字も自己を表現していません。他人の思想を書き、他人の論調を書いているからです。オウムの話し声や、拡声器を通して聞こえてくる歌声がどんなに美しくても何ら感動を覚えないのと同じです。自己を表現できる文学こそが「真」の文学なのです。「真」の文学は、心の中にあることだけを書いたものです。そこには「私」しかいません。

章雲が「空巣」は「真」の文学だと言っているのは、それまで文革を黙して語らなかった冰心が、初めてそれを否定する文章を書き、三中全会以後の祖国への期待を、冰心なりに素直に書いていて、読者が前向きになるよう励まされるからであろう。書きたいとの思いから書かれたものだからである。八十年までの冰心は、しばしば花や鳥、月光、児童等を好んで描いてきた。それらの文章も「真」の文学であったはずである。それらには冰心ならではの優しさが描かれていたのだし、自ら書きたいとの思いに駆られて書かれた題材でもあったのだから。ならばなぜ、冰心は「空巣」になって「真」の文学を持ち出したのだろうか。花や鳥を書いていたころの冰心には、「真」の文学を書いているのだとの充足感がなかったからである。二百七十篇余りもの花や鳥の散文を発表しながら、「若いときは書いた

ものを発表する勇気がなかった」と言い、「私が散文を書くのは、追い詰められ、窮余の策として梁山泊へ逃げ込んだようなものです」(21)とも言っていることから推測するに、冰心が「真」の文学だとして書きたかったものは他にあったのである。社会問題を書きたかったのではなかろうか。しかし、それを書くには多大な勇気を必要としたのである。また冰心が書きたいものとは別に、中央政府が書くよう強制しているものがあった。強制されて書かれた文学は、たとえ読者を前向きにするものであっても、「真」の文学ではなかった。書きたいものも、書かねばならないものも書けなくて、張自強が言うように、四十年、どうすることもできない悩みを心に鬱積させてきたのである。だから、冰心は八一年三月、二一年には言わなかった言葉、「真」の文学とは、心に気がかりのない状態で書かれたものである、とつけ加えたのである。

新中国成立後、中央政府が一貫して書くよう強制してきたのは、労働者、農民、兵士を讃える文章であった。冰心は、中央政府の意に添うよう努めていたが、書いた作品は、指導者には、あまり歓迎されなかった(22)。周揚（一九〇八〜八九）からも、「新詩にも大いに欠点がある。最も決定的な欠点は、労働大衆とのうまい結合がないことだ」(23)と批判されたとき、彼女は「確かにそのとおりかもしれない」と素直に認めている。

周揚同志の言うことは、他のジャンルにも言えることです。私は五四期から創作の道を歩みはじめ、一九五一年日本から帰国した後もずっと、小説はもちろん、詩を書き、散文を書いてきましたが、労農大衆と結びつかなかったし、結びつけなかったのです。ですから生活範囲も狭く、創作の源泉は早々と枯渇してしまいました。これも私が、五四期以後の作品が、日増しに少なくなっていった原因です。(24)

労働者、農民、兵士をなんとかうまく書いていこうと悪戦苦闘していたころの冰心について、「冰心研究会」副会長卓如女史はつぎのように語っている。

冰心の創作にもっとも致命的な影響を与えたのは、全体の社会的、政治的背景だったと思います。当時の作家は、労働者、農民、兵士を書かねばならなかったし、大躍進を書かねばならなかったのです。冰心はというと、彼女が熟知しているのはやはり知識分子でした。彼女の生活経験からいえば、労働者、農民、兵士との接触には限度があったのです。しかし当時の多くの作家同様、彼女も労働者、農民、兵士と接触するよう努めました。たとえば、十三陵ダム（北京昌平県）の工事現場に行って働いたり、労働の過程の中で、多くの労働模範や農村婦女子、少年を訪問したりしました。五十年代後半には、多くの労働模範や農村婦女子を題材とした作品も書きました。[25] しかし、知識分子を書くようには思いのままにいかなかったのです。[26]

労農大衆、兵士をうまく作品にすることができなくて、悩んでいた冰心に追い打ちをかけるように反右派闘争が起きた。蕭乾が冰心について書いた文章の中に、

一九五七年、彼女も新聞紙上に名前が挙げられたとき、私は当時の自分の境遇も忘れて、ずっと彼女のために気をもんでいた。[27]

という一節がある。筆者はこの記述に関する詳しい事実を知りたくて、北京に住んでいる蕭乾に手紙を書いた。[28] 折り返しきた返事にはつぎのように書いてあった。

一九五七年二月、費孝通[29]が「知識分子的早春天気」という文章を書いた。共産党を讃える内容だったのだが、あとで中央政府によって、右派の毒草だとして批判された。この文章の中にはいくつか唐詩が引用されていた。費孝通と冰心は、民族学院の教授楼で隣同士で、引用した資料が、冰心から出たものであると費孝通が自白したため、冰心も取り調べを受けた。そのことが『人民日報』紙上に載ったのである。しかし結果は、冰心は英語ができて、当時、頻繁に国際会議に出席していたので、右派として検挙はされなかったが、夫呉文藻と弟、息子が反

党反社会主義思想だとして右派のレッテルを貼られたのである。冰心は右派にはされなかったが、事態はかなり危険で、弓の音にも怯える鳥のようであった。国際会議出席等で、彼女の知名度は益々高まっていったが、反面、彼女は益々慎重になり、言論の発表は少なくなっていった。(30)

そして文化大革命が始まると、冰心は筆を取ることを禁止される。禁が解けたあとも現在に至るまで、冰心は自らの文革のときの様子を語っていない。つぎの話は筆者が蕭乾から聞いた話である。

右派となることは免れたものの、文革が始まると冰心はそれはひどい目にあった。右派とならなかった他の作家と同様、五八年から六六年に発表した文章に対して激しい批判がなされたのだ。私は冰心に関する多くの壁新聞も見た。主な批判は冰心と燕京大学との関係のことだった。紅衛兵は、彼女のことを「極悪非道な奴だ」と罵り殴った。当時彼女は七十歳近くで、老いて体も弱っていたので、毛沢東は行かなくてもよいといったのに、自ら進んで下放した。(31)五七幹校で、私も彼女と一緒だったけれど、指導者の言うがままになっている冰心を見るに忍びなかった。また彼女の労働が指導者にほめたたえられたとき、私は何とも言えない気持ちだった。

自分を表現できる文章を書きたくて悩み、中央政府が強制する労農、大衆、兵士も思うように書けなくて悩み続けていた時期に、反右派闘争が起こり、冰心は慎重になり書かなくなっていった。続いて文化大革命が勃発すると、ペンを持つことさえ許されなくなり、書けない時代が十年も続いた。文革終結後の三中全会は、他の作家同様、冰心にとっても再生のときであった。しかし先に触れたように、本当に勇気を持って立ち上がったのは挫折以後であった。挫折直後、冰心は一気に小説を三篇書いた。挫折後から現在までに書かれた散文の数は二百三十篇余りにもなる。それらの小説や散文からは、月や花の姿は消えて、中央政府への不平や不満、提言が書かれるようになった。「もう怖いものは何もない、言うべきことはちゃんと言うわ」と心を堅く決めて、現在まで書き続けてきたのである。

三

「社会を感化する」ために作家としてスタートした冰心は、晩年になって再び、社会問題意識の高い作品を書くようになった。五四時期の使命感を老いても失わず、というより一層強く意識しているように思われる。書きたいことが書けない時代が長く続いたが、一生を通じて、社会を変えていくのだとの信念を持ちつづけてきた。それは現代の日本人には実感しにくいものだが、やはり中国の知識人として、冰心が心の底から中国を愛し、国民を愛する作家だからであろう。巴金もつぎのように言っている。

冰心は、我々の国家と民族の前途のために、自らの心血を注ぎつづけている。彼女が心のこもった言論を吐き、感情溢れた文章を書くのは、我々の多災多難な国家のためであり、我々の忠実で、真面目な人民のためである。(32)

蕭乾もつぎのように言っている。

冰心が批判し、憤るのは我々のこの国家を、民族を、我らが共産党を深く、深く愛しているからこそである。彼女は永遠に老いない、彼女の筆も永遠に老いない。彼女の心はしっかりと人民大衆に張りついているのだから。(33)

死を意識する年代になってやっと勇気を得た冰心は、生ある限り、社会が変わり、人々が前向きに生きていけるような文章を書きつづけていくはずである。

注

(1) 「両個家庭」は一九一九年九月、「斯人独憔悴」、「秋風秋雨愁殺人」は同年十月、「去国」は同年十一月に発表された。

(2) 問題小説を書くことを最初に提唱したのは胡適である。彼は一九一八年四月発表の『建設的文学革命論』の中で、「家庭

の悲惨な出来事や婚姻の苦痛、女子の地位、教育の不適正等、種々の問題を文学作品の中に描いてみよう」と言って、一年後、自ら小説「差不多先生伝」を書いて彼の主張を実践した。同年少し遅れて、周作人も『人的文学』で、「新文学は人道主義に基づいて、人生の諸問題に対し、記録検討を加えるべきだ」と述べ、一九年二月、『中国小説里中的男女問題』の中で、「問題小説は、近代平民文学の産物であり、その名の示すとおり、人生の諸問題を論及する小説である」と述べ、冰心が同年九月、「両個家庭」を発表すると、早速、彼は「これこそ問題小説だ」と言って絶賛した。（厳家炎『中国現代小説流派史』一九八九年　人民文学出版社）

(3)『人民日報』（一九八八年七月一八日付）に掲載された、「能愛才能恨—為冰心文学創作生涯七十年展覧而作」による。

(4)「空巣」は一九八〇年三月、「明子和咪子」は八四年五月、「橘」は八四年九月、「万般皆上品……」は八七年七月、「遠来的和尚……」は八八年四月、「落価」は同年五月、「干渉」は同年八月に書かれた。

(5)冰心が初めて、冰心というペンネームを使って「両個家庭」を『晨報』に発表したとき、『晨報』側が冰心では、男性か女性か分からないとして、冰心女士として掲載した。冰心の小説が問題小説と言われ、社会に大きな反響を巻き起こしたことから、以後、「女士の文章」といえば、社会問題意識の高い文章を指して言うようになった。（卓如『冰心伝』一九九〇年上海文芸出版社）三三頁参照。

(6)『聯合報』副刊（一九八八年五月五日付）の「冰心晩年景況」による。

(7)注（6）の「冰心晩年景況」の中で、冰心は教育界の現状を告発した、蘇暁康、張敏著「神聖憂思録」を『人民文学』第九期で見て、共鳴した」と言って、張自強に、彼女が見聞きした八十年代中期の中国の教育界の現状を語っている。

(8)『羊城晩報』（一九八八年二月二三日付）に掲載された「教師何以喪志」による。

(9)「冰心研究会」（一九九二年十二月二三日発足。会長巴金、副会長蕭乾、卓如等）の機関誌『愛心』（愛心雑誌社　第三巻第九、十期）十一頁に掲載。

(10)李輝『蕭乾伝』（一九九三年　江蘇文芸出版社）に冰心が寄せた序による。

(11) 注(3)に同じ。

(12) 「児童文学工作者的任務与児童文学的特点」(『冰心全集』一九九四年　海峡文芸出版社)七巻七九頁参照。

(13) 卓如『冰心伝』(一九九〇年　上海文芸出版社)の序として掲載されている、巴金から、著者卓如に宛てた手紙の中の一節である。

(14) 詳細は、岡田「謝冰心の『我請求』をめぐって」『お茶の水女子大学中国文学会報十三号』一九九四年四月)六七頁参照。

(15) 中共第十一期中央委員会第三回全体会議。一九七八年十二月に開催された。

(16) 天児慧『歴史としての鄧小平時代』(一九九二年　東方書店)「第一章政治社会構造の基本構図」(第一節　重層的変動から多元構造的変動へ)を参照。

(17) 注(6)の「冰心晩年景況」による。

(18) 注(6)の「冰心晩年景況」による。

(19) 『綏化師範学報』(一九九〇年第三期)に掲載。

(20) このコメントは章雲の論文の中で引用されている。後、一部が『文学報』一九八七年三月九日「致文学青年」に掲載される。

(21) 「従五四到四五」(『冰心全集』一九九四年　海峡文芸出版社)七巻四十頁参照。

(22) 筆者が蕭乾から直接聞いた話。注(28)参照。

(23) この周揚の談話は、中国共産党中央委員会の機関誌『紅旗』(一九五八年第一期)の「新民歌開拓了詩歌的新道路」の中に掲載されているが、五四以来の新詩の成果と欠点を言ったもので、冰心を名指しで批判したものではない。

(24) 「従五四到四五」(『冰心全集』一九九四年　海峡出版社)七巻三八頁参照。

(25) 「一個最高尚的人」、「大東流郷的四員女健将和女尖兵」(共に一九五八年六月に執筆)、「十三陵水工地散記」(五八年八月に執筆)等。

(26) 筆者が一九九五年九月二日、「北京首都賓館」で会見したときの談話による。
(27) 注（3）参照。
(28) 一九九五年七月十七日手紙を出し、七月二六日返事をもらい、八月三日、復興門外の自宅で会見した。
(29) 一九一〇年生まれ。江蘇省出身。社会学者、現在民主同盟中央委員会首席。
(30) 冰心は夫呉文藻が、一九五八年四月、右派として捕らえられたとき、周総理夫妻に、「もし夫が右派なら、私も右派です。私たちの考えは同じなのですから、私も捕まえるべきです」と抗議をするが、「今もっとも彼を助けることのできる人は、もっとも身近にいる人、あなたしかいない。あなたがしっかり彼を助けて彼を改造させて欲しい」と言われ、沈み込むが、夫に「冤罪は必ず晴れる」と逆に慰められた。（「関於男人―我的老伴―呉文藻」『冰心全集』一九九四年　海峡文芸出版社）八巻四五頁。
(31) 冰心は一九七〇年一月五日、咸寧（湖北省東南部）に下放し、湖北作家協会五七幹校で労働をし、六月、湖北省沙洋中央民族学院五七幹校に移り、翌年八月北京に戻った。
(32) 注（13）参照。
(33) 注（3）参照。